

時期場所:令和5年5月13日(土) 東京都江戸川区タワーホール船堀 307 会議室 13:50~16:20

演 題:「大東亜戦争メモランダム 300 話を俯瞰・総括して敗因に迫る」

主 旨: 先の大戦理解の一助となればと、A4サイズ 1 枚にワンテーマで纏め始めたメモランダムも何時の間にか 300 話を超えました。大東亜戦争の全体図とまではいかないまでも、浮かんでくるものがあります。その一つが、先の大戦の敗因は何だったのか、そして現在の我々が深刻に反省していたのか、反省すべきは何だったのか、日本国(人、システム)の弱点は何なのか等々が浮かび上がってきました。それらを説明できればと思います。

講 師: 山下 輝男 氏 (元:陸将・陸自第5師団長)

(現:公財「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」理事長)

## I:講 演「大東亜戦争メモランダム 300 話を俯瞰・総括して敗因に迫る」

### 1. はじめに

○ 2025 年 戦後 80 年 大東亜戦開戦から 88 年

(国力上無謀な戦いを挑んだ、軍が政治を壟断したと断じるだけで良いのか?)

○ 戦後 80 年、日本は何を反省したのか? 先の大戦の教訓は何か? 日本人とは何だったのか?

○ 敗戦から学ぶもの多し!

以下の14の視点から考察してみたい。

### 2. 14の視点からの説明項目

- |                    |                 |
|--------------------|-----------------|
| ① 持たざる国の国家戦略の適切性は? | ⑧ 初期侵攻後の戦争指導の破綻 |
| ② 国防方針は妥当だったのか?    | ⑨ 戦争終結の機会の捕捉は?  |
| ③ 政軍関係が歪では?        | ⑩ ドクトリン開発等柔軟性は? |
| ④ 同盟戦略は適切だったか?     | ⑪ 日本の軍事組織の弱点は?  |
| ⑤ 国家としての情勢分析の適切性は? | ⑫ 陸海軍の対立、解消しえず? |
| ⑥ 対米(英)感情と開戦決意     | ⑬ 政略?           |
| ⑦ 戦争指導計画の適切性は?     | ⑭ 国家のリーダーは?     |

### (1)視点1 持たざる国の国家戦略

明確な国家戦略が確立されていたか?

◎日本の地政学的与件と戦略方向

- ① 大陸辺縁弧状列島、資源小国、四面環海、大洋
- ② 朝鮮半島は日本の脇腹に突きつけられた短刀
- ③ 大陸とは無縁ではいられない宿命

◎戦略的方向性

- ① 大陸に進出・・・大陸国家と連携、進出
- ② 大洋に活路・・・海洋立国を目指す、海洋国家との連携 →日英同盟は日本に有益

## ◎持たざる国日本の昭和期の国家戦略(生存・発展)の方向性 (257話)

- ①資源を海外に、日清・日露の権益拡充 + 南方域
- ②足らざるを国民の勤勉さや優秀さ、精神力で自力補填
- ③自らの生存を他国に委ねる(大なる国の従属的存在)
- ④同盟・合従連衡(何れかの国家(群)との連携強化など)

\*長期国家戦略は存在したか? →「日本の野望:中国侵略と世界制覇?」 →田中上奏文とされるが明白な偽書

## ◎WW I を受けての苦悩 国家総力戦を如何に戦う

→WW I は総力戦・次期戦争は更なる総力戦

→持たざる国日本が、国家総力戦をいかに戦うか? →危機感!

→海外権益を拡充し国力を増進(満州・朝鮮は自活に十分だったか?)

→国家総動員体制の確立(国家のリソースを集中)

- ① 日清・日露権益の維持・拡充
- ② 大東亜共栄圏構想の具体化
- ③ 国際協調により自活

→かかる日本が戦うとすれば、

「奇襲攻撃で戦意破砕」又は「海外資源を獲得し国力増進」しつつ戦う他なし。

## (2)視点2 国防方針の妥当性等 (296話)

### ◎帝国国防方針はあったが、明確な国家戦略文書はあったのか?

(参考:安保3文書(国家安全保障戦略、国家防衛戦略、防衛力整備計画)R4年12月)

### ◎帝国国防方針 (M40、T7、T12、S11(1936)4回改訂)

1936(S11):6/3 国防方針 6/30 国策大綱(国策の基準) 8/7 外交方針

1940/7/26 基本国策要綱(大東亜共栄圏建設を基本に)

\*改訂国防方針の概要:背景;ソ連極東軍の増強、海軍無条約時代における国防国策の検討必須

「国家の国防は帝国国防の本義に鑑み我と衝突の可能性大にして且つ強大な国力殊に武備を有する米露西亜を目標とし併せて支那、英国に備ふ」

\*国防国策(国策の基準)

目標:「東亜ノ安定勢力トナリテ東洋ノ平和ヲ確保シ世界人類ノ安寧福祉ニ乗献シテ茲ニ輩国ノ理想ヲ嚴現スルニアリ」

当面の日本の国策:「東亜大陸ニオケル帝国ノ地保ヲ確立スルト共ニ南方海洋ニ進出発展スルニ在リ」

\*国防方針の問題点は何か? →①国家戦略を前提にすべきであるにもかかわらず、文書策定を軍部が積極的に主導した。

②短期決戦・対一国戦を想定したが、対支・対露・対米英の三正面(脅威)対処と成った? ③陸海軍の思惑が優先し、妥協と総花的と成った ④政戦略の一致が次第に稀薄化した ⑤長期的視点の存否が不明?

### ◎陸海軍の戦力造成の根拠 = 国防方針

- ・陸軍の悲劇・・・対ソ準備した軍を南方戦線転用
- ・海軍の愚・・・伝統的邀撃帯構想を放擲して短期決戦追及

## (3)視点3 政軍関係が歪 (21,205,210話)

### 問題認識

○日清・日露戦争の際には政・軍関係は良好

○昭和期の戦争の際はどうだったのか

◎明治システムの成功体験の呪縛・盲信 ⇒修正も変更も出来ず

## 問題点

### \*政府と軍部の組織構成

政府(国務):天皇をトップとし、内閣は総理大臣はじめ陸海軍含めた各省庁で構成された

軍部(統帥):天皇をトップとし、陸海軍は夫々参謀本部(陸軍)と軍令部(海軍)が並置された

### ① 統帥権の独立 (戦争指導組織(大本営、連絡会議、最高戦争指導会議))

\*統帥権(欽定憲法11条):平戦時を問わず政府の輔弼外

\*大本営は戦時又は事変に際し必要に応じ設けられる戦時機関(日清・日露・支那事変・大東亜戦争)国務から独立

1937. 11. 20設置 第1回御前会議、大本営政府連絡会議(1937. 11. 24)統帥と国務の緊密な連絡協調

\*大本営政府連絡会議:陸海軍大臣は大本営の一員となるも首相は蚊帳の外

➡政府大本営の協調体創設(近衛内閣)

\*最高戦争指導会議(1944. 8. 4)

### ② 軍部大臣武官制

\*現役武官制(1900年)・非現役でも可(1903年)・現役制復活(1936年)(2.26 事件関与疑われた将官の大任  
就任阻止・・・内閣の不成立や倒閣事例(脅迫の手段ともなった陸軍大臣が常に争点

\*問題点:①システム上の問題 ②政治も軍事も解る指導者の不在という問題

\*クラウゼヴィッツの名言:「戦争とは、異なる手段を以て継続される政治に他ならない」

### ③ 内閣制度

\*内閣総理大臣も国務大臣の一人として他の国務大臣と同格

## (4)視点4 同盟戦略は適切だったのか (102,182,192 話)

◎日英同盟廃止(1923/8/17)後の同盟対象国は? 米(英)、蘇、独、中

① 米英は?

② ソ連は

国防方針との関係・軍縮条約等・対日政策

\*以上の観点から同盟国家足り得ない

③ 中華民国との和解提携の可能性は

・日本の支那事変不拡大が失敗したのは何故か?

第二次上海事変(1937/8/13~)で支那事変が中支に拡大

第二次上海事変:独の支援を受けて近代化された中国(国民党)軍が、上海租界地に奇襲的に攻撃

・中国の対日不信

➡結局同盟・連携するとすれば消去法で「独」のみ

◎その独は如何なる国だったのか?

\*中独合作により経済的軍事的支援を中国に

\*日本は第二次上海事変で4万名の戦死者を出し大苦戦。この原因は「中独合作」により独の軍事・経済的支援、軍事的後押し、軍備拡張推進、上海疎開地攻撃進言、8個師団は独式に訓練。

\*日本:上海は海軍の警備担任、海軍の増派要請により戦力の逐次投入、海軍は渡洋爆撃敢行、10.26 上海制圧。

#### ◎独との同盟の適否は

\*日独伊三国同盟の締結:独ソ不可侵条約(1939.8. 23)によって一旦消えた(頓挫)ものが復活して締結(1940.9. 27)であった。→「バスに乗り遅れるな」の風潮(独の快進撃:1940.6 パリ陥落・対英上陸?)

→近衛首相や松岡外相米国牽制の為推進・陸軍は対ソ牽制上推進・海軍も軟化

\*独ソ戦開始(1941.6. 22):陸軍は北方問題解決の好機・国策再検討 北進・南進・南北準備陣→熟柿北攻。好機南進

#### ◎何が問題だったのか

\*ヒットラーの独は信頼するに足る同盟国たりしか →①第二次上海事変・②独ソ不可侵条約(独は背後の安全確保し西方進攻)・③独ソ奇襲攻撃開始(独は二正面作戦の具は犯さないと判断)

\*日本は独にのみり込み過ぎ、特に陸軍の独傾斜(晋に学ぶ陸軍・メツケル・留学)

\*軍同士の戦略調整全く無し →①密接な戦略調整なし(連合国との大なる相違)

②実質的な軍事的連携なし(ロンメルは敗退で幻とも) ③遣独潜水艦のみ

→日本に主導権無く、国際情勢に翻弄される

→日英同盟(1902~1923)は日本にも益

### (5)視点5 国家としての情勢分析は適切だったのか (125,156,227 話)

#### 対象国等に関する情勢分析

○欧州情勢は複雑怪奇と平沼内閣総辞職(1939/8/28) 自らの稚拙さを露呈

○米国の参戦防止策は無かりしか? 米英可分・不可分論争等

#### \*米国に関する情勢分析

・米国第一主義(モンロー主義・孤立主義)の根強さ:①ロンドン空爆後でも欧州戦非介入(80%) ②FDR の三選公約(当選)欧州の戦争には介入せず ③アメリカ第一(主義)委員会の創設

・日本の真珠湾奇襲により「第一委員会」の運動消滅

・FDR(フランクリン・デラノ・ルーズベルト第 32 代米大統領)の宣戦はしないが、戦争はするという苦肉の策

・米英可分・不可分論(海軍は不可分、陸軍は可分)あるも、認識の一致共有無し

→戦争宿命論と冷静な戦略分析

○三正面对処戦争の無謀さ

○知米派多数存在 排除、知見の活用なし

○内閣情報室創設(1940/12/6)……国家情報機関は?

\*第二次近衛内閣は内閣情報部を局に、各省所轄の情報・宣伝事務の一切を一本化

・縦割り意識強く統合不十分、結果的に謀略宣伝がメインに……文化の差、勢力争い、派閥か?

### (6)視点6 対米(英)感情と開戦決意 (309 話)

国民感情は国策に如何なる影響を与えるのか? その変遷は?

①英米協調路線 1920 年代までは英米協調が基軸

②英米に対する不満の蓄積

人種差別撤廃案の否決、排日移民法、軍縮条約の不平等強要  
満州事変リットン調査団対日干渉

### ③支那事変の中支への拡大に伴い対英感情の転換

天津租界封鎖事件 ⇒ 反英大会頻繁開催

対米感情は抑制的 パネー号事件、アストリア号による遺骨環送

日米通商航海条約破棄通告や援蒋問題はあったが・・

### ④日米交渉の不調と米国の対日制裁

独の快進撃や同盟締結等⇔日米交渉の不調

マスコミの対米英報道強硬に

**\* 国策と国民感情 相互にシンクロして開戦決意の一因に**

## (7)視点7 戦争指導計画の適切性は (25,59,87,96,125,180,185,215,222,250 話)

戦争指導計画:唯一の計画:「対米英蘭戦終末促進に関する腹案(1941/11/5 政府連絡会議決定)

### ◎腹案の概要

南方要域攻略・自存自衛 蒋政権屈服(VG6-2)

独伊との連携で英の屈服→米の継戦意思喪失

長期持久態勢 あらゆる手段で米海軍誘致撃滅

(腹案が依拠せる秋丸機関の研究結果 英米合作経済抗戦力調査 (1941/7))

◎軍事的に米国を屈服させ得ないとすれば、この腹案しかあり得ないと思料するが以下の様な問題を内包する。

①天皇の裁可なく強制力も権威も無し

②独の戦勝に過度に依存

③日米戦開戦直前の策定、準備不足

④支那問題の益々の泥沼化 对支一撃論の盲信

⑤長期持久態勢準備不足

⑥独との連携無く、英の屈服できず、インド洋作戦の中途半端

⑦特務機関の運用 軍事作戦寄与? 戦争目的寄与?

⑧軍政:諸国を味方に付けるような方法・方策は政略指導大綱の策定遅し(1943. 5)

⑨米国を覚醒させ、米英可分追及できず (腹案が想定していない真珠湾奇襲攻撃の妥当性は? 腹案とハワイ空襲作戦の不整合性)

### \*問題点1:支那問題を解決し得ず(腹案の肝)

①数多の和平交渉成就せず(185話)

对支:船津・トラウトマン・汪精衛・孔祥熙・スチュアート・桐工作・米

对米:日米諒解案・日米首脳会談・対米交渉甲乙案・暫定協定案

②戦略の大転換できず(188話)・・・ 思いとは裏腹に泥沼化

对支一撃論奏功せず、蒋介石政権の戦意判断誤り(腹が座っていなかった)、好機あるも和平条件の吊り上げ

不拡大方針の不徹底(政府・大本營の責任)

③支那からの撤退決断できず(59話)

④連合国の思惑に載せられた!(日本に多正面作戦を強制)

⑤日清・日露戦争の「十万の英霊・二十億の国帑」を無にし得ぬ!

⑥暴支膺懲の世論高揚

**\*問題点2:独との軍事的連携等…「中東で日独の軍事的接続」**

- ①独の北アフリカ作戦…ロンメル敗退で挫折(1942.7)(作戦目的は伊の支援であり、中東接続は?)
- ②日本のインド洋作戦…西南セイロン開戦で勝利するも機動部隊転用で中途半端
- ③インド独立運動の支援により英国に圧力(インパール失敗)

**\*問題点3:進軍限界の無視…拡大し過ぎた戦面…計画の問題では無いかも知れぬが…**

**\*問題点4:暗黙の戦域分担…陸軍(大陸) 海軍(太平洋)**

**\*問題点5:十分に詰められた計画だったか?・文言妥協(日本の問題解決法・徹底的議論嫌う傾向)**

**\*問題点6:特務機関の運用と軍政等**

- ①特務機関の多数運用:陸軍の特殊任務実働グループ

合計二十数個の特務機関運用・東南アジア(南・F・岩畔・光・ペナン・安・西原・その他)

- ②占領地域の軍政:政略指導大綱の策定(1943.5:遅い)・関係諸国と日本の関係は好意的に発展

**(8)視点8 初期進攻作戦後の戦争指導の破綻 (92,190 話)**

◎当初の戦争指導構想

初期進攻後に、長期持久態勢の確立 戦略守勢への移行

初期進攻作戦後の進出域(1942年夏頃)

◎初期進攻作戦後の戦争指導構想の案

・当初の構想通りに戦略守勢に移行 or・初期作戦の戦果を拡張

◎陸海軍対立

陸軍:当初案の通り

海軍:戦果拡張 軍令部=豪州方面占領、邀撃態勢確立

連合艦隊=中部太平洋早期決戦

◎今後採るべき戦争指導の大綱(1942/3/7)

陸海軍の意見調整の結果

「既得の戦果を拡充し」「長期不敗の態勢を整えつつ」と妥協的文言

➡ 理解不能! どうしたいのか? 何が問題だったのか

**\*問題は、結局文言上の妥協に墮し、戦争指導が混迷**

\*海軍はミッドウエー作戦に邁進し、大惨敗 **戦局の転換点**…結果的に長期持久態勢が構築出来ず(重要資源の確保・内地への環送・重要資源帯の防衛・現地国との連携協力態勢構築)

\*望ましい戦略守勢態勢:早い段階から絶対国防圏(1943.9.30 御前会議決定)の要塞化➡**戦争の様相は異なった筈**

・絶対国防圏:戦術論でいう必成目標・最終確保地域は何だったのか?

・何故? ①開戦当初の快進撃で傲慢・過信・米軍侮蔑とも ②声望大なる者(山本五十六連合艦隊司令長官)に引き摺られた ③堅確な戦争指導計画ではなかった ④海軍に防勢概念無し

\*長期不敗の態勢確立方策(条件は?):①絶対国防圏の不沈空母化(一大要塞群の構築) ②内地と南方資源地帯との海上交通路の確保(シーレーン防護) ③陸軍部隊の南方要域への大幅な増強・陣地構築(洞窟陣地)・所要の物資集成

④航空機や船舶の増産 ⑤米軍反攻を遅らす為の潜水艦部隊による通商破壊や艦艇攻撃

⑥連合艦隊の泊地の整備と防護

- \*長期持久態勢の構築は出来たのか?:①重要資源確保(概ね達成:開戦二年目 360 万 L:パレンバン)(162 話)
  - ・内地への環送(潜水艦や敵機の攻撃により思うに任せず)(第 115 話)(護衛隊創設遅く質量共に粗末・海軍は短期
  - ②決戦により勝利すれば問題無しと判断 ③防空不十分 ④陸軍南方燃料廠等の創設・油田の復旧可、最盛期23000 名 ⑤軍官民三者連携完全とはいかず ⑥戦面の拡大・戦力消耗・陸軍の無関心冷淡さ
- \*南洋群島の不沈空母化の失敗(第 116 話)
  - ・海軍第三弾作戦方針:「主作戦を南東方面に指向し、航空作戦を主体として、陸軍と協同して敵の進攻を撃し その間に我が戦力の充実を以て攻勢に転じて、逐次に迎撃帯を推進して用地を確保する。」
  - ・前進根拠地を中核とし、三線の縦深を有する基地航空群で構成、第一から第九まで設定
  - 成立の条件:①必要かつ十分な航空打撃力 ②基地の抗堪力 ③各島嶼間の相互支援 ④必要かつ十分な後方支援力
  - ➡何れも叶わず戦力消耗、準備未完

## (9)視点9 戦争終結機会の捕捉は? (45,204,225,278 話)

戦争の常道:戦いを有利な条件・態勢で止めるかを模索する

- ①終末構想の概要
- ②様々な終戦工作・研究
- ③ソ連仲介和平案の奇怪さ
- ④幸福な(?)終戦を迎えられたのは?

### ◎終末構想の概要

- \*当初の終末構想:英国及び蔣政権との個別的な講和追及・米国との条件付き講和(このために、①連合国のシーレーン破壊作戦、②独との中東での連携『対ソ、対支補給路遮断』、③ビルマルート遮断、④重慶政権圧迫と対支和平工作)
- \*防勢作戦(軍事的に勝利し得ない戦争)に於ける終戦機会の捕捉:①連合国の連携乱れを衝いた条件付き講和 ②和平機会の捕捉を狙った条件作為的「一撃和平」

### ◎様々な終戦工作・研究:真剣に模索し始めたのは戦局不利になってから

- \*①燕京大学・長周仏海ルート、②今井参謀副長ルート、③駐日スウェーデン公使、④スイス(アレン・ダレス)
- \*海軍の終戦研究:高木惣吉少将
- \*陸軍の終戦研究(278 話)・・・陸軍は頑迷固陋だったのか?

#### ①戦争指導班(戦争指導課)

#### ②天皇の戦争終結の意向を受けた研究開始(1943.3.25):作戦課とは異なる計画

- ・長期戦争指導要綱(案)➡大東亜戦争終末方策(1943.8.9):伊降伏・独の戦況悪化・米軍の反攻急・腹案構想破綻
- ・9 月案は日本の単独・早期講和企図・自主的終結を目標・悲観的戦況推移・講和条件も俎上に・対ソ譲歩案も

#### ③対米一撃論により終戦を有利に:ソ連の対日参戦の可能性が低い内に対米決戦で機を掴み、大本营・政府の認識統一、天皇の裁可を得るとの案。陸軍内では少数派だが、それ以外と密接な連携

### ◎ソ連仲介案の奇怪さ(45 話)・・・日ソ中立条約の締結(1941.4.13)

\*腹案:独ソ講和、枢軸国への引き入れ

\*サイパン陥落(1944.7.5)以降活発化・・・岸・近衛・一部の皇族・吉田茂等

- ・近衛上奏文(2 月)・ヤルタ会談(2 月:ソ連参戦決定済み)・中立条約不延長通告(4 月)・鈴木貫太郎内閣(終戦工作任務)・独の降伏(5.7)・最高戦争指導部会議(ソ連和平斡旋決定 5.9)・御前会議(本土決戦決定)・天皇終戦工作指示(6.22)・広田元首相/マリク駐日大使会談 ソ連への特使派遣決定(7.29)・ソ連対日参戦布告(8.6)

→ソ連仲介案は無理との情報あるも、日ソ中立条約の有効性を信じた？ 仲介を期待し得る大国無く他に方法無かった

## ◎幸福な(?)終戦を迎えられたのは?(225話)

\*天皇のご聖断(1945.8.10)

\*和平条件の引き下げ……国体護持

「敗者が自己の中核的価値を傷つけられないと感じれば戦いを止める決断をする。」と指摘する研究者あり。

\*日本軍の敢闘精神、烈々たる殉国の想い

\*戦争相手国とのチャンネルを維持……グルー大使等の知日派、穏健派

→フランクリン・デラノ・ルーズベルトの無条件降伏要求を如何に評価するか？

## (10)視点10 ドクトリン開発等柔軟性は

- ① 空母機動部隊の創設と運用 (262話)
- ② 島嶼を巡る戦い(日:陸海協同、海軍陸戦隊、米:海兵隊の創設と運用)
- ③ 大艦巨砲主義からの転換 (19話)
- ④ 航空部隊の協同、統一指揮、独立 (279話)
- ⑤ 基地航空部隊の活用 (116話)
- ⑥ 空挺部隊の挺進行動 (57話)
- ⑦ 潜水艦の運用について
- ⑧ 戦略爆撃 (307話)
- ⑨ 渡洋上陸作戦
- ◎ 日本の発想力は是とするも、実現力には日米の差を感じる。
- ◎ 大規模組織化・システム化の差

### Q1:空母機動部隊の創設と運用(262話)

\*第一航空艦隊の創設:空飛ぶ水雷艦隊→航空艦隊(1940.4.10);第一・第二・第四の三個戦隊:各戦隊;空母二隻・駆逐隊 →真珠湾奇襲・ミッドウエー作戦以前までは大戦果を挙げ、被害微小

\*ミッドウエー作戦以降:日本の運用技術を学んだ米国の圧倒的戦力の前に頹勢を強いられた

\*史上初の空母機動部隊の決戦……珊瑚海海戦(1942.5.4~8)

戦術的には日本の勝利なるも、戦略的に失敗

太平洋域内における空母数:1943.1迄日本優勢・同2月五角・1944.5(米21:日9)・1945.8(米27:日3)

### Q2:島嶼を巡る戦い:(日;海空協同 米;海兵隊の創設と運用

\*海軍陸戦隊(日):海軍の指揮下・陸戦隊(臨時の陸上戦闘部隊)・特別陸戦隊(常設の陸戦隊)

・上海特別陸戦隊:呉鎮守府第101特別陸戦隊(特殊部隊)・海軍根拠地隊(広義の陸戦隊)

\*米海兵隊(米):太平洋方面を管轄する海軍(大部隊の地上兵力無く単独で戦う羽目・海軍長官の指揮下にあった海兵隊を大統領直轄の合衆国艦隊の指揮下に・陸軍の反対を押し切って海兵師団を創設。敵前強行上陸を主体とする作戦展開を研究・海兵航空団、海兵隊独自の戦闘車両を始めとする装備の研究・水陸両用軍団として参加。)

→ガ島・タラワ・珊瑚・サイパン・ペリリュー・硫黄島・沖縄戦

### Q3:大艦巨砲主義からの転換(19話)

\*大艦巨砲主義:WW I 弩級・超弩級戦艦艦隊の有効性認識・戦艦主役・航空母艦は脇役



- \*日本:日露戦の勝利・太平洋に回航する米戦艦の主砲 40cmとしてそれを上回る大和型戦艦を建造
- \*開戦劈頭:①マレー沖海戦;基地航空部隊の攻撃により英東洋艦隊の新戦艦プリンスオブウエールズ・レパルスを撃沈  
②真珠湾攻撃;空母艦載機による米太平洋艦隊の撃破
- \*航空主兵論が台頭するも:大和型三番艦の継続、空母(信濃)への改装決定(1942. 7)

#### Q4:航空部隊の協同・統一指揮・独立(279 話)

- \*WW I 独立空軍保有国:英・伊・仏・独
- \*帝国陸海軍の航空運用:①陸軍;地上作戦支援・協同 ②海軍;艦船主砲の着弾観測・艦船の制空援護・一部に航空主兵論あるも。
- \*大東亜戦争前に「空軍独立の契機」3 回あるも、海軍の反対で消えた
- \*初期侵攻作戦時には協同はスムーズ:航空兵力の役割・重要性を世界は痛感
- \*初期段階で指揮の統一主張あるも海軍の反対:マリアナ失陥後の捷号作戦で決戦兵力は航空兵力との認識共有。なれど、航空戦力の集中統合発揮は出来ず。一部において指揮の統一あるも陸海航空の協同が主。

→航空機の性能・訓練場の問題もあり飲み込まれることを嫌った

#### Q5:基地国空部隊の活用(116 話)

- \*海軍の迎撃帯構想:海軍第三段作戦(1943.3. 25);連合艦隊のZ作戦、迎撃帯設定要領発令「前進根拠地を中核とし、三線の縦深を有する航空基地群で構成」→第3 遊撃帯;トラック(前進根拠地)・マーシャル/ブラウン/マリアナ(基地群)

→必要且つ十分な航空打撃力は? 不沈空母化は? 相互支援は? 後方支援は?

#### Q6:空挺部隊の挺進行動(57 話)

- \*空の神兵(空挺部隊・挺進部隊):WW II 初期の独立空挺部隊の活躍に刺激を受けた陸軍は研究開始  
・1941.11.5(教導挺進第一連隊・同 12.4(第一挺進団)・1942.2.14(パレンバン空挺作戦敢行)・1944.11 末(第一挺進集団 →専ら飛行場襲撃・航空機破壊に任じた
- \*海軍の場合:海軍鎮守府の常設陸戦隊をパラシュート部隊に・横須賀鎮守府の第一特別陸戦隊が 1942.1 メナド(セレバス島降下作戦 →直上降下で損害大なるも成功 →日本軍として初の空挺降下作戦であったが、小規模であり、陸軍との軋轢回避の為発表遅らす

#### Q7:潜水艦の運用について:日本の潜水艦保有状況(当初 64+116 隻:米 317 隻)

- \*この潜水艦を如何に運用するか:(通商破壊・防護又は補助戦力として敵艦攻撃)→日本は敵艦攻撃に使用が米軍の警戒厳しく成果小
- \*日本の潜水艦は優秀(決して見劣りすることなしと:①巨大潜水艦(伊 400(潜水空母)・②特殊潜航艇
- \*巨大潜水艦 伊400(潜水空母):全長122m・全幅12m(原潜登場までは世界最大の潜水艦)・格納庫に折畳式攻撃機「晴嵐」3 機を搭載・建造開始 1943.1 竣工 1944.12 ・パナマ運河奇襲作戦→ウルシー環礁攻撃に変更運用・米軍により破壊、オアフ島沖に沈む・2013 年発見(潜水調査も)
- \*特殊潜航艇:真珠湾内の敵艦攻撃、その他(5隻中2隻が湾内潜入成功し魚雷攻撃)・大型潜水艦に搭載されて作戦地まで輸送

#### Q8:戦略爆撃(307話)

- \*大東亜戦争間の戦略爆撃:独のゲルニカ空襲(1937.4.26)・連合国のドレスデン空襲(1945.2.13~)・米軍の東京や日本本土への空襲・日本軍の重慶爆撃(南京~漢口~重慶へと首都を移転、1938.12~1941. 9 に掛けて重慶への戦略爆撃・海軍主導(井上成美の提言と言われる)・新鋭の九七式重爆撃機・九六式陸上攻撃機を主体とする陸海軍航空兵力による長距離進攻を実施・軍事目標に限定したが、悪条件もあり住民にも被害が続出、絨毯爆撃も実施と?・無差

別爆撃との国際的非難あり(連合国は宣伝戦が上手だ!)・不思議なことに東京裁判では問題されなかった(連合国のご都合主義?) →戦略爆撃は戦略目的を達しえない?

## Q9: 渡洋上陸作戦

\*日本の敵前上陸作戦:①支那事変:第二次上海事変(陸軍2個師団を杭州湾上陸;1937.8.23) ②日米開戦劈頭のマレー上陸作戦(1941.12.8) ③ガ島奪回作戦(一木支隊・川口支隊・第2師団…何れも失敗)

\*開戦劈頭では、赫々たる戦果を挙げているのだが、その成功を具(つばさ)に検討せずして、米軍にお株を奪われた

→侮蔑? 制海・制空権の確保、周到な準備、圧倒的な戦力

## (11)視点 11 日本の軍事組織の弱点は? (177,212,255,274、43,124,157,186,244、51,23,60 話)

### ①作戦偏重主義 ⇔ 情報軽視、兵站軽視

攻勢・攻撃優先、艦隊撃滅優先⇔作戦目的の喪失 (177話 長蛇を逸したり!)

### ②現場追認、現地部隊の暴走を止め得ず

### ③人事:学歴主義、温情主義、積極果敢推奨

戦時抜擢や実績主義なし⇔実績主義、抜擢人事(米軍)

### ④強硬論や声望大なる者に引き摺られる傾向大

### ⑤攻勢優先主義、精神主義

### ⑥科学技術の活用等

## Q1-1: 作戦偏重主義 ⇔ 兵站軽視

\*兵站軽視(212話・255・274話):①座布団(土俵とか準備された空間とかの表現)無きインパール作戦(274話)

兵站に関しては、ジンギスカン作戦(牛による運搬・屠殺して食糧に)・僅か3週間の糧秣携行・食糧の現地調達が指摘される。一方、②日本版電撃戦たるマレー作戦では、作戦と兵站の吻合宜しく(255話) ③戦争末期には太平洋の島々は、補給なく孤立自活飢餓状態、玉砕(212話) 東奔西走の輸送作戦も虚し!

→兵站を軽視した訳ではないが、大部隊の作戦では、兵站が最重要課題であると認識しておらず、

小部隊での経験や小部隊での戦闘経験を大部隊の運用に適用した愚?

## Q1-2: 作戦偏重主義 ⇔ 情報軽視

\*情報軽視等(43・124・157・186・244話):戦略レベルから戦術レベル迄、情報センス欠如(思い込み・戦い相手の侮辱…戦意・能力・企図心等々)

\*敵による日本の暗号解読率:外務省(95%)・海軍(70%)・陸軍(0.6%)

\*ミッドウエー作戦:日本軍の攻撃地点まで解明

\*海軍甲事件(1943.4.18)・乙事件(1944.3.31)

\*日本も優秀な学生等を集めるも、米国の比ではなかった(日本文化の研究すらも行ってた)

\*防諜態勢は? 防諜意識は?:ゾルゲ事件(1941.10.15)はその端的な例か;解読されたことを知らずに使い続けた愚・大島駐独大使の危惧報告無視・ →米国は防諜に細心の注意

\*マッカーサーの参謀と呼ばれた陸軍将校「堀栄三少佐」:正確な情報の収集とその分析という過程を軽視する大本営にあって、情報分析によって米軍の侵攻パターンを的確に予測した

## Q2: 国際宣伝に完敗した日本

①第二次上海事変 日本海軍渡洋爆撃非難

②上海駅の「赤ん坊」のライフ誌への掲載(1937.10.4)

③宋美齡蒋介石夫人の米国での活躍(11話)

④蒋介石の強かさにしてやられた(270話)

⑤プロパガンダの巧拙(213話)

⑥大西洋憲章と大東亜宣言(298話)(198話)

⑦リメンバー・パールハーバー、パターン死の行進

### Q3:攻勢・攻撃優先、艦隊撃滅優先 ⇔ 作戦目的の喪失

\*長蛇を逸したり!(177話)

海軍作戦に於いては、艦隊決戦を追求する余り、作戦目的を逸したことがある。悔やまれる!

・真珠湾攻撃(1941.12.8) ・第一次ソロモン開戦(1941.8.9)

・南太平洋海戦(1942.10.26) ・レイテ沖開戦(1944.10.20)

\*陸軍も作戦目的を明確にせず、上級司令部と隷下部隊間の作戦目的に関する認識の一致無く作戦する場合が多々あった。

\***攻勢優先主義**:①敵を侮蔑、米軍を支那軍と同等と見做す②戦意高揚の為のプロパガンダを信じた?③戦術レベルでは宜なるも、戦略レベルでは如何なものか④積極的作戦で失敗してもそれを許容する風潮と人事

\***教条主義?**:①懲りずに白兵銃剣突撃を繰り返す日本陸軍の愚(日清・日露の成功体験、ノモンハンの反省なし)②対上陸戦術・水際防御推奨・敵上陸前に砲爆撃により撃滅(231話)(後にペリリュー島の戦いで敢闘:中川大佐の指揮統率と戦訓の活用)(硫黄島・沖縄戦:後退配備・洞窟陣地活用)③**艦隊決戦主義**:日本の空母機動部隊・航空部隊の優位性を実証したにも拘らず脱却できず(19・263話)

\***人事・学歴主義・温情主義・積極果敢推奨**:戦う軍隊のダイナミックは人事とエモーショナル微温的・集団主義的人事  
・信賞必罰をしない軍隊;日本:①ミッドウエー作戦の責任は誰がとったのか?②辻 正信参謀の責任は?③軍中央の命に違反した者の責任追及は?(支那事変不拡大方針の破綻・満州事変以来の悪弊:独断専行・下剋上・幕僚統帥)  
④支那派遣軍の南京への独断追撃⑤支那事変間に於いても度々の独断専行(対支一撃論奏功せず)⑥幕僚統帥頻々たり⑦「察すべし」と「以心伝心」社会と軍隊

\*米軍の場合:①キンメル大将解任・降格・退役②ニミッツ少将を太平洋艦隊司令官に抜擢③アイゼンハワーも大抜擢④師団長を更迭すること一再ならず

\*独の場合:①将軍から一兵卒へ降任②ロンメルも抜擢

\*ソ連の場合:銃殺刑も

➔ 声望大なる者・権威有る者 ➔強硬論に屈する弊あり ➔ 真珠湾奇襲やミッドウエー作戦の認可

\***現場追認・現地部隊の暴走を止め得ず**:陸軍の悪弊;現地部隊の独断専行を上級司令部が追認:①第二次長沙作戦(作戦目的達成よりも敵軍撃滅に狂奔)②盧溝橋事件・南京への追撃等々(随所に現地部隊の独断を止め得ず追認)③インパール作戦(1944.3.8~7.3)(南方軍や方面軍の意図:「危険性認識、無理すべきではない」と軍の意図が乖離し、調整されることなく作戦発動)(寺内南方軍司令官・河辺方面軍司令官と牟田口軍司令官の認識統一が無かった:1年を超える作戦準備間に何をしていたのか?牟田口軍司令官の異常な性格・幕僚の動きにも問題あり)

➔上級指揮官は部下指揮官に意図を明確に理解させる必要 ➔「察せよ」ではダメ

➔インパール作戦中止(?)に関する両将軍(河辺・牟田口)の会談(1944.6.5)➔両将とも作戦断念を意識しつつもそれを発言せず「察せよ、察すべし」に。

\*南京への追撃戦(1937.11.15):上海に日本軍が上陸し戦況が好転、参謀本部は作戦地域を限定していたが、現地第

10 軍は独断で追撃を決心(11.15 発動)。→松井岩根中支那派遣軍司令官はこれを追認 →以心伝心・忖度・明察等の日本的な意思伝達は疑義を請じる懸念大……満州事変の独断専行が一種のサクセスストーリーと成ったか？

Q4:人事上の問題(Q3:「人事・学歴主義・温情主義・積極果敢推奨」参照)

Q5:科学技術の活用等:日本の優秀な技術(60・64 話)……日本の技術陣は無能だった訳ではない

\*独のレーダ技術導入(戦後の電子立国の基礎)(284 話) \*酸素魚雷(266 話) \*風船爆弾(82 話)

\*八木アンテナ \*航空機(零・隼・一〇〇司偵等) \*戦艦大和(武蔵・大和・三番艦は未完の世界最大の空母「信濃」へ)

\*原爆開発(73 話) \*バルバス・バウ(艦船の舳先に取り付けられた衝角。主に海戦の際、相手軍艦の喫水線下船腹を突き破り沈没させるための兵器として使用され、現代のように造波抵抗の減衰を目的としたものではなかった？

大和型戦艦や空母にも導入された？)

\*日米技術力の差について(60 話)

・レーダー技術:日本は方位のみ・米軍は方位距離高度……重要性の認識度の差

・近接信管(VT):米軍は真珠湾以降(1942.3)研究・翌年実践投入

・品質管理の差:①日本は航空機エンジン(彗星・飛燕) ②米軍は大型航空機や戦場機動力向上軽戦車から重戦車・真空管・ベアリングまで

・大量生産技術の米国と職人芸の日本……互換性ある武器製造の差

・設計思想の差:零戦(防弾性能より運動性能優先)・落下傘・救命セット

・OR 手法の開発:対潜水艦作戦・攻撃精度向上

・暗号解読技術に掛ける執念の違い、米国は資源と人材を大量導入

(12)視点 12:陸海軍の対立解消し得ず (94 話、205 話、277 話)

①統帥組織上の問題:陸海軍の対立を仲裁・調停しうるのは天皇のみ

②陸主海従への不満の鬱積・反発

③興味と関心の差が体質化(陸:人、国家 海:技術や艦艇)

④国家予算獲得対立

⑤仮想敵国の相違

⑥出師(すいし)準備と動員、戦争決意の陸軍・決意無き海軍

⑦建軍の範とした国の差、建軍の経緯の差

⑧陸軍の政治化、反政治的体質の海軍

⑨陸軍の暴走を抑止するのが海軍との意識

⑩現地レベルの協同は比較的良好だが、国家レベルでは相互不信

⑪国策の方向性を巡る対立

⑫親独派の多い陸軍と冷ややかな海軍

⑬陸の長州vs 海の薩摩 の暗闘？

◎統帥組織上の問題:陸海軍の対立を仲裁・調停し得るのは天皇のみ

\*その権能を果たすべきではないとの意識(そのように育てられた)

\*自己組織優先主義・大局観の欠如・投資組織の一元化を模索すれど実現せず・異常なほどの相互不信

\*陸海軍間の軍務調整機関として「大元帥府」「軍事参議院」

・元帥府(1898)は天皇の軍事上の最高顧問;明治期には適切な補佐・昭和に入ると長老として権威しかなく、元帥たる宮様が統帥部長に就任し、元帥府の実態はなくなる

・軍事参議院(1903年)には機務(非常に重要な事務。機密の政務)は知らされず

◎明治のリーダーシップは?・・・政治家の容喙を許さずは、陸海軍共に一致

◎作戦思想(構想)の調整不能・・・溝を埋め得ず、文言妥協で決着 →悔いを千載に残した

◎海軍あって国家無しとの非難すらも

\*天皇の戦時間の大局観は睥睨すべき(時に叱責、懸念を表明)

\*英国:三軍統合調整機関として参謀総長会議

\*米国:英国との軍事部門における密接な戦略調整の関係もあり、1942.7 統合参謀本部設置

### (13)視点 13 政略(軍事力以外の分野)は?

○総動員体制(国家総力戦体制) (297 話)

○大東亜共栄圏構想 (298 話)

○国際情勢分析と軍事力以外の力の活用

関係国への働き掛け 蒋介石に比すれば絶無

(11話 宋美齡、270話 蒋介石、292話 実はソ連と戦っていた)

謀略放送 効果の程は不明なるも特務機関を作戰に寄与させることを目的に運用したのだが・・・

\*軍政は適切だったのか

現地の実情にマッチング? 軍事的要求が大?

\*軍事が外交をリード

軍の政治化 (95話 帝国陸軍は何故政治化したのか?)

#### Q1:総動員体制

①国家総動員法(1938.2.24)成立、翌年施行(#1 近衛内閣):\*前史「国家総動員計画設定処務要綱案(1929.4)の発展、\*軍需工業動員法(1918.5.7)は本法成立の廃止

②所轄部局:国務院 資源局 企画院

③平時規定:国民登録制度・技術者の養成・物資保有義務・業務計画の設定・演練試験研究命令・事業の助成等

④第二次大戦期における米国の動員:産業動員体制整備・保存命令・在庫統制・制限命令・労働争議制限・労働動員等々

→日米共に似たような政策実施

#### Q2:大東亜共栄圏構想の崩壊(298 話)

①萌芽:1938.11.3・#1近衛内閣・東亜新秩序声明(#2 声明)・支那事变解決に苦慮・首都重慶移転

②国策として決定:基本国策要領(1940.7.26)・大東亜新秩序;二本柱①南方経済政策・支那事变の解決)

③具体的動き:大東亜省・大東亜会議・大東亜宣言

④崩壊の原因:準備不足・関係国の理解と協力不十分・国内の足の乱れ

#### Q3:軍政(占領地行政)は適切だったのか?

①軍政に関する基本的政策:「南方占領地行政実施要領」(1941.11.20 連絡会議)

\*重要国防資源の急速獲得と作戦軍の自活 \*残存統治機構の活用

②陸海軍の担任:陸軍;香港・比・馬・ボルネオ・ビルマ・蘭印(スマトラ・ジャワ)・海軍;陸軍の外郭要域

③諸相:\*蘭印(歓迎)・比(日本は侵略者)・その他(中間)・・・ 蘭印成功の要因(アジア主義的同質性原理による軍政)

\*比:一定の自治・将来的な独立保証・面従腹背

\*占領地の独立:当初明示せず・政略指導大綱(1943.5末)・独立承認・一部は日本編入

\*欧米植民地からの解放は二次的だったとの批判あり

\*方針等の決定時期遅延・他の機関の関与稀薄

### 参考:民族自決と軍政に関して

#### ①民族自決と大西洋憲章(1941.8.14)・大東亜宣言(1943.11.6)

\*連合国:民族自決唱えず・非占領下の欧州のみに適用する案。但し異議が出て曖昧なまま

\*日本:植民地解放・民族自決を宣言・一部を日本に編入しており理念の徹底に問題あり

#### ②軍政に関して:日本が本格的に軍政に取り組んだのは、対米英戦開始後

\*遅く・準備不足は否めず

\*各国の実情にマッチングしたか?

\*軍以外のノウハウの活用は?

\*長期的侵略意図無し of 証左

### Q4:軍特に陸軍の政治家の要因

①陸軍の特性

②総力戦時代における国家態勢に不満

③日清・日露権益侵害には反発

④社稷を思わぬ政治家に対する不満

⑤独善

⑥革新風潮・各種勉強会への積極参加

⑦統帥権独立等の悪用に気付く

⑧軍事専門家たるの意見尊重要望

⑨大正デモクラシーの影響

⑩国内混乱時に於ける軍の秩序維持機能に自覚

⑪安全保障は国家の最優先事項との意識

⑫国民領導は軍の使命

⑬正しきことは天職に達する

⑭直接的な手段優先

### (14)視点14 国家のリーダー

○ 能吏は育てられても、リーダーは育てられない日本の風土

治世(平時)の能臣、乱世の雄

リーダーを必要としない日本社会(平穏な農耕社会)か?

○ 日本にヒトラー・ムッソリーニ・スターリンなく、ルーズベルトもチャーチルも居ない。

されど国策が自然に決まる。

マスコミ、大衆(世論)、軍部、政治家が自然にある方向に収斂していく不可思議

○ 大所・高所からの判断が出来ぬ体質

和の集団、集団主義

○ リーダーは育てられるか、育てるには

○ 何に学ぶか 歴史に学ぶ、自学研鑽、修羅場を追体験

### 結論(参考資料)・・・米戦略ジェフリー・レコードが抽出した日米戦決定過程の教訓(141話)

①「恐怖心」と「プライド」

②潜在敵国の文化・歴史への造詣

③牽制された側の心理

⑤戦争行為としての経済制裁

⑥危険な精神性重視

⑦戦争宿命論の呪縛

#### ④戦略に沿った軍事作戦

### 3. 結論

- (1)日本人は戦略的思考が苦手？
- (2)リーダーシップに難
- (3)大部隊の戦略に過誤多し、第一線部隊は勇戦敢闘
- (4)マ元帥回顧録 日本の将校は上級ほど質が落ちる
- (5)日本の意思決定法は問題
- (6)米国や蒋介石にしてやられた感あるも、ミスや誤判断も
- (7)日本(人)の弱点を知って、それを克服

日本的システムの弱点是正 ドラスティックな改革至難（決定事項の修正出来ない！）

- (8)日本(人)は優秀だし、弱点克服により飛躍可能(自信を持つべし！)
- (9)動き始めた歯車は止められないのか？

### 4. 最後に一言

- (1)日本が自主的・主導的に大東亜戦争を主導したのであれば、斯くまでも無用な戦争にはならなかったのではないかと考える。
- (2)日本には主導権無く、追い詰められ、十分な体制も採り得ない状況下で、戦争を遂行しなければならなかったのだと確言出来る。
- (3)とは言え、だからこそ日本は、日本人の弱点が顕著に現れたのではないかと考える。

### 5. 質疑応答

Q1:「対米英蘭戦終末促進に関する腹案」には海軍も同意していたのか？

A1:山本五十六連合艦隊司令長官は、当初から米海軍の撃破思想に矛盾として基本構想に取り入れた。そして軍令部も承認した。(トップ不在の日本の傾向である)

Q2:真珠湾攻撃では第2次・第3次攻撃をやれば良かったのではないかと？ 又、ハルノートやヴェルナ文書等が言われるが、ハルノートとはどんなものか？

A2:真珠湾の第2次・第3次攻撃及び米本土迄は山本司令長官も力不足を考えての事であろう。しかし早くやるべきであった。ハルノートの関しては、実は我が国はソ連と戦っていたことが分かる。スターリン主義者が影響を及ぼしたものがハルノートを作り、これが米国の「最終通告書」として我が国は受け取った。更に、暗号が解かれミッドウエーも大敗した。

Q3:白人主義の問題は国民に浸透していたと思われるが、大東亜共栄圏は国民に浸透していたのか？

A3:人種差別問題やユダヤ救出も日本は寛容であった。大東亜共栄圏は国民に説明すると共に。アジア諸国への説明も軍事的なものもしっかりやった。しかし政治的な努力不足や、日本人の対外的弱さか？ このことは現在も続いている弱点ではないか？

Q4:支那から撤退し、真珠湾攻撃をやらなければと考えれば、大東亜戦争の大きな誤りであったのではないかと？ 支那からの撤退の可能性は？

A4:日米戦回避の一つではあったのではないかとと思う。暫定協定案提出も可能であったが、ハルノートが出てしまった。もっと早い時期から北支に限定して、(中国か満州か)満州を旨くやれば良かった

のだろうが、蒋介石の泥沼化に引き込まれてしまった。国家的に軍事的にルーズベルトに勝てなかった。

Q5:現在の国防・安全保障の観点から、大東亜戦争の敗因は「合理性の欠如」(統帥権・大本営・愚かな国民・組織・人等にあったのではないのか？ つまり、かなりの軍事的な専門知識や政治家に専門的意見が反映されていたのだろうか？ 例えば、自衛官の国会答弁がないではないか。

A5:①あまりにも軍事的力が強過ぎた？ ②国家的・軍事的合理性が欠如していた？ 両者であろう。現在に当てはめれば、昔よりは良くなってきたが、まだまだ不十分である。

## II. 総括 塾長

### 1. 謝辞及び総括的コメント

(1)2月には「沖縄戦」における「島田叡県知事」3月には「関東軍の作戦主任参謀の草地貞吾大佐」について学びましたが、その間における軍事作戦上の要求と国民保護という観点から、日本人及び日本国のシステムの特性みたいな考察機会がありました。更に今回は大東亜戦争という視点から同様の考察が出来たと感謝申し上げます。

\*一般に言われている「同調圧力」からの「個の確立」の重要性と難しさを感じる一方では、

\*国民性の視点から、我が国の国体が「御聖断・玉音放送・大命・承諾必謹」という手順通りに円滑に進められたことにより、国家の破滅から回避できたこと等を学びましたが、本日もプロパガンダの観点も含めた「日本人・日本国の特性」という観点から、「深い考察」が出来たように感じております。

(2)今回は、「大東亜戦争への道」(中村繁著・展転社)と『危機の20年』岩波文庫(E.H.カー1939)をザッと予習して参りましたが、前者では「大東亜戦争への道の二大流れ」として「①欧州ではモンロー主義をとる中でのアメリカのアジア政策における積極的関与との戦い、及び②「共産主義との戦い」として捉えています。その二大流れの中で「日本人・日本は」どの様に戦ったのか？ を考察出来ました。米国は日露戦争後アジア政策の一環としての対日政策が著しく強硬と成り、ロシアはロシア革命後コミンテルンを通じての対日政策が激しくなったことは正に否めない。

\*後者 E.H.カーの WW I 終～WW II 始の「危機の20年」からプロパガンダの観点で、第一次世界大戦頃から「プロパガンダ」が戦争や国際関係における「力」として行使されるようになってきたが、日本人としてこれに対する対応の在り方についても考える機会と成った。講師は「日米のプロパガンダの違い」について第267話他で、日米のプロパガンダの違いを論じておられます。

・皆様も御承知の、イギリスの国際政治学者で外交官の「E.H.カー」は：**国際政治における三つの力**つまり、【①軍事力・②経済力・③**意見を支配する力**(プロパガンダ)】を論じています。

・現在の我が国でも、ウクライナ戦争・地球温暖化つまり脱炭素問題等は政治家から学者マスコミ迄口を揃えた動きが徹底しており、又、かつて世界一だった一人当たりの GDP は今や27位(H元年)・大卒者初任給は米国の約1/3(262万円)・平均年収では408万円で韓国の444万円に次ぐものです。この状態は僅か1/4世紀の間に生じたことですが、財務省の財政の健全化つまり緊縮財政・国債と国民の借金等々言い触らされて久しいものです。**本当にそうなのでしょうか？**しかし、かつてのマスコミ、大衆(世論)、軍部、政治家が自然にある方向に収斂していく不可思議のことを



我が国民は繰り返しています。日本人はプロパガンダにも弱点を呈しやすいのかもしれない。

## 2. 孫子の視点からの学び

(1) 相守ること数年にして、以て一日の勝ちを争う。而るに爵禄・百金を愛しんで敵の情を知らざる者は、不仁の至りなり。人の将に非ざるなり。主の佐に非ざるなり。勝の主<sub>に</sub>非ざるなり。

戦争計画に少なくとも三項目(目的・進軍限界・終末処理)が必要だと言われ腹案こそ然りであった

\*【腹案が依拠せる秋丸機関の研究結果・英米合作経済抗戦力調査】⇒E.H.カーも三つの力の「経済力」面を重視した、「①主敵は英国・②支配するインド洋・③進むは西へ」という唯一の「敗けない戦略(戦争計画)」であったはずである。

①南方要域攻略・自存自衛 蒋政権屈服・勝ち易きに勝つ (孫子第四「形篇」)  
(重慶作戦:五号作戦:陸海軍協同計画)

②独伊との連携で英の屈服→米の継戦意思喪失・勝ち易きに勝つ (同上)  
(セイロン作戦:十一号作戦:陸軍独自計画)

⇒ミッドウエー海戦・ガダルカナル奪還作戦失敗により重慶作戦とセイロン作戦は中止され、  
「インド東北部侵攻作戦 (二十一号作戦:陸軍独自計画:援蒋ルート遮断)も中止され、事後の  
インパール作戦の強行に影響を及ぼしのではないかと? ⇒好機を失した作戦の強行?

③長期持久態勢 あらゆる手段で米海軍誘致撃滅(西太平洋決戦思想)⇒真珠湾攻撃で破綻

(2)「国の師に貧なるは、遠き者に遠く輸(夕)せばなり。遠き者に遠く輸(夕)せば則ち百姓貧し。

(孫子第二作戦篇)

\*「攻勢終末線」(石原莞爾);「戦力は根拠地と戦場との距離の二乗に反比例する」

海軍は開戦当初から「西太平洋に於ける迎撃艦隊思想」であったはずであるが、真珠湾攻撃に臨み、  
ドウリットル(1942.4.18)に振り回され、ミッドウエー・南太平洋へと作戦距離を延ばしていき、  
遂には「攻勢終末線」を大きく超えてじり貧と成り、その先にはみじめな大敗戦が待っていた。

⇒戦争指導計画:「対米英蘭戦終末促進に関する腹案(1941/11/5 政府連絡会議決定)」は破綻した。 ⇒ 戦略の失敗は戦術や戦闘では補えない。(クラウゼヴィッツ)

⇒而るに爵禄・百金を愛しんで敵の情を知らざる者は、不仁の至りなり。人の将に非ざるなり。主の佐に非ざるなり。勝の主<sub>に</sub>非ざるなり。(孫子第十三用間篇)

⇒「孫子曰く、兵とは国の大事なり、死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。

(孫子第一始計篇) ⇒兵(戦争)とは博打ではない!

おわり。